

Aーは人間のポテンシャルを 引き出してくれるツール

街の小さなお肉屋さん Aーで業務効率改革

那覇市内から車で約1時間の場所に位置するうるま市。従業員数27名の仲松ミートは、この地で肉の冷凍食品を中心に製造販売を行う小さな会社。取引先は県内のスーパー、飲食店、病院、社員食堂など多岐にわたり、地元で愛されているお肉屋さんだ。

主力商品は「ハムチーズサンド」などの揚げ物。手作りのフライ商品を冷凍し、翌日箱詰めして出荷される。作業をする従業員の女性がそばにあるAーアシスタントに「アレクサ、ハムチーズサンド5枚入り50ケース記録して」と声をかける。アレクサは「はい、メモに保存しました」と返答。これにより、今まで手で入力していた生産管理が音声により自動で行えることになった。

仲松ミートがAーを導入したきっかけは、内閣府の「令和2年度沖縄型産業中核人材育成事業」の「製造業（食品製造業）に伴走支援でき

るIoT専門人材育成プログラム」のモデル企業に手を挙げたことに始まる。同社の課題に対してプログラムに参加した5つのグループがIoT導入計画を策定。それらの提案のなかで、Aーアシスタントによる生産管理体制を構築する案を採用したのだ。

提案のなかには壮大なIoTシステム導入の案もあった。しかし、工場の主力メンバーである高齢者や障がいのある従業員が、キーボード入力する必要がなく声のみで簡単に指示が行え、導入費用も安価。将来の切り替えも簡単に行える点が同社に合っていると判断しての採用だった。実際に導入したことで、社内の業務効率化や新規事業開発などの改革を推し進めている。

この改革を担っているのが執行役員 仲本和美さんだ。以前は書店の経営をしていた仲本さんが、10年前に姉夫婦が経営する仲松ミートに入社。それまでの同社は、受注した分だけ作り、繁忙期に多数の受注が入れば従業員の残業や休日出勤



有限会社仲松ミート
執行役員 総務・経理統括部長
仲本和美さん

企業データ

仲松ミート ● 1982年創業。沖縄県うるま市所在。冷凍食肉加工品を、沖縄県内の飲食店・病院・老人ホーム・社員食堂などに販売。OEMや自社オリジナル製品の開発から製造まで手がけている。



AIアシスタントと会話方式で生産情報を記録する従業員たち。AI導入で働く意識が変わってきたようだ。



AI導入後に仲本さんが開発した新商品の数々。主力の冷凍食品とは異なる分野に事業が広がっている。

AIが次のチャレンジに向けて 背中を押してくれた

に頼るといふ操業方法だった。

「家族経営の延長で製造管理もできていなかったんです。月にどれだけ作ってどれだけ売れているのかも把握できていなかった。だから当初は業務効率化のためには在庫管理が必要で、モデル企業に手を挙げたのも、在庫管理の仕組みを提案してほしい気持ちからでした（仲本さん）」

しかし、IoT専門人材育成プログラムに参加者たちからヒアリングを受けるうちに、必要なのは在庫管理よりも、自分たちの生産能力を正確に知ることだと気づいた。生産能力がわかれば、どれだけ受注でき

るか、そのための仕入も計画的に行うことができる。採用した提案は、

AIアシスタントと業務改善アプリを使って、製造した商品の名前と個数を音声で入力すると、データがパソコンへ蓄積されていくというシンプルなシステムだった。スマホでAIアシスタントに何かをお願いすると同じイメージだ。

70歳を超えるベテラン従業員は、AI導入によって仕事に対する意識が変わったと語る。

「以前はただ作るだけで先が見えませんでした。今はいつまでに何をどれくらいという目標が明確に設定

されています。目標がわかると、それをクリアするためにはどう工夫すればいいか考えるようになり、やりがいにも繋がっています」（社歴18年目の宮里清子さん）

「AIが意識改革につながり、従業員たちのポテンシャルが上がったと感じています」（仲本さん）

おいしいものを作って 喜ばれる新規事業を拡大中

AIを導入して2年。生み出された時間で仲本さんは新規事業を次々と立ち上げている。その一つがレトルト食品だ。IoT専門人材育成プログラムの検討時期はコロナ禍で行動制限がかかっていたことで、主力商品の一角を担っていたバーベキュー用の肉などの売上が激減していた。そのときに巣ごもり需要を見込んで新規開発したレトルト食品が好

評を博した。

新規事業について発信すると多方面から「こんなものを作りたい」という相談が舞い込んでくるようになった。農家からの相談では一緒にジヤムを作った。レストランからメニューをレトルトにして販売したいと申し出が来るなど、協働の相談が相次いでいる。

仲本ミートには「無駄なものはない」という社長のこだわりがある。規格外商品や廃棄される部位の有効利用方法を考えていた仲本さんは、牛の肺やまぐろの皮・血合いなどを利用したドッグフードを思いつき商品化している。

「人間にも犬にも喜ばれるおいしいものを作り続ける。それが我が社が目指す姿で、AI導入で業務効率が上がってきたからこそ多様なことにチャレンジ

できています」（仲本さん）

面白いことが好きで、やりたいことがまだまだたくさんあるという仲本さん。新規事業の作業工程を整理していけば、障がいのある従業員ができることも増えると考え、次は作業工程もAIの力で可視化していくことにしている。

「AIの導入は、新しいことにトライする架け橋になってくれました。でもAIを入れればなんとかなるのではなく、どう使うかを人間がちゃんと考えないとうまく動きだしません。沖繩には『なんくるないさ』という言葉があります。『なんとかなる』と勘違いされていますが、本来は頭に『まくとぅそーけー』がついて『正しいことをちゃんとやっていけばなるようになる』という意味。人のAIとの付き合い方も同じことだと思います」

